

---

---

# 各研究班分科会プレゼンテーション



青山 本日の全体会の午前の中心となるセッションに移りたいと思います。班別の研究テーマと、活動状況報告および分科会の内容紹介でございます（資料 p. 94～97 参照）。分科会の方は A、B それに明日の C の 3 つの分科会に分かれております。それぞれの分科会ごとに 2 つのセッションが同時に並行して行われていきます。従いまして、全部で 6 つのセッションがあるわけですが、この全体会では、各班にこれまでの活動状況報告をしていただきますので、それをお聞きになった上でどの分科会に出るかを選択していただければと思います。

各班の報告は、最初に阿部・井上班、次に教材開発チーム、3 番目に山西・小山班、4 番目に野山班、5 番目に渡戸・関班、そして 6 番目に佐藤・金班の順番に行います。各報告は 12 分ほどでまとめていただきます。

では最初の阿部・井上班ですが、こちらは班のサブコーディネーターの石塚昌保さんとウラノ・エジソン・ヨシアキさんのお 2 人にお願いします。

## 【阿部・井上班】長野県上田市での協働実践研究とは

サブコーディネーター・石塚昌保 どのような研究テーマを持って、どのようなメンバーが、どのような活動をしているのかということをご報告致します。

まず研究テーマです。長野県上田市における外国につながる子どもたちを取り巻く課題について、行政、企業、市民との連携協働での取り組みの在り方を模索するというのが大きな研究テーマです。

研究活動については、行政、企業、市民の連携協働での取り組み、将来的には企業、自治体、NPO、市民団体が連携しながら構築する、次世代の外国人住民がスムーズに日本で生活できるモデルを提案しようということが最終的な活動になります。そこで初年度としては、上田市の企業や行政、上田市に住む外国籍の方からのヒアリング調査を中心に活動を行っております。これは、地域の声を基盤にしなからずは課題を明らかにすることを目標としております。

サブコーディネーター・ウラノ・エジソン・ヨシアキ 私は本センターフェローをしています。この班のプレフォーラムが、どういうことを想定して行われたかということをお話ししたいと思います。

私たちの班は、日本におけるブラジル人の子どもの教育に焦点を当てています。教育という観点だけではなくて、その周辺にある移住過程、日本に来ることによって、あるいはブラジルに帰ることによって、あるいはまた日本に来ると、そういう循環的な移動の中で、あるいは定住化の中でどういった問題が起きているのか、そしてどういったフレームワークがこれから必要になってくるのかということについて研究をしています。そして自治体、NPO、企業と連携しながら研究を進めています。

今日の内容ですが、まず上田市の地元企業調査の結果やブラジル人児童・生徒の日本における教育参加過程についても報告します。地元企業調査については研究員の大木義徳さんが、ブラジル人児童の教育参加過程については、石塚さんと上田市の外国人相談員として大活躍している堀之内テレーザ文子さんが報告します。パネルディスカッションでは、外国人の実態と企業の



石塚昌保



ウラノ・エジソン・ヨシアキ

人事戦略ということをテーマに話しますが、上田市における外国籍児童・生徒の支援、ラテンアメリカ人移住過程、そして今後の課題という3つのポイントについて話す予定です。

これまでの活動を少し映像を交えながら紹介します。ここが上田市立東小学校で、こちらでは「虹のかけはし」というとてもいい取り組みが行われています。外国人児童・生徒のための教室です。このことについては堀之内さんが詳しく報告しますが、企業関係者そして実際に上田市で仕事をされています日系人、上田市の皆さんが協働してプロジェクトを進めています。この事業のおかげで、多くのブラジル人児童・生徒が本当に日本の社会、そして学校に適応していく上でとても助けられています。今、流れた曲ですけど、『Passe em casa / うちに来てください』という題です。私たちのセッションにもぜひお越しください。ありがとうございます。

**青山** どうもありがとうございました。外国につながる子どもたちの教育とそれを取り巻く環境ということですが、それに関しては企業、行政、学校というふうこれまでバラバラに取り組みを行ってきたわけですが、その三者が一堂に会してこのように協働研究を行うというのは非常に画期的なことではないかと思えます。ご関心のある方はぜひこちらの分科会の方へ参加していただければと思います。

それでは引き続き、2番目の教材開発チームの活動研究報告をお願いします。こちらは高橋センター長、よろしく願いいたします。

## 【教材開発チーム】 どう教材を開発するか

**高橋** 私はセンター長というだけではなくて、本センターが進めている社会貢献プロジェクトのひとつである教材開発プロジェクトマネージャーという立場でも活動してまいりました。正確に言えば、この活動は協働実践研究ではなくて、一種の社会連携の活動であるわけですが、佐藤・金班、あるいは阿部・井上班など協働実践研究のさまざまな班の活動とも非常に関連があります。そういう意味で今回のフォーラムでも独自の分科会を設けることにいたしました（資料 p. 98～106 参照）。

このプロジェクトの対象は公立の学校、小学校に通うブラ



高橋正明

ジル人の子どもたちです。教科についてはいろいろ議論した上で、小学3年までの漢字と小学6年までの算数にしました。算数は、足し算、引き算から始まり、掛け算、割り算、分数までの教材を開発し、それをネットで配信して自由にダウンロードして使ってもらおうというプロジェクトです。

三井物産からプロジェクトの話があったのは3年ぐらい前のことでした。そこで2005年12月に現場の先生方や専門の研究者にお集まりいただいて会議を開き、いったいどのような教材を作っていけばいいのかを議論しました。その後さまざまな模索が続いて、ようやく06年9月に具体的な作業が始まりました。

プロジェクトは第1ステップと第2ステップから成っています。昨年9月に第1ステップが開始され、約半年かけてプロトタイプ、試作品ですね、を作り上げ、それを07年4月に本学のウェブサイトで公開しました。現在までだいたい4万件ぐらいのダウンロード数があります。しばらく試行錯誤があり、おそらくは08年1月ごろから第2ステップが開始できると思います。08年はちょうど日本人のブラジル移民100周年ということですので、約1年かけて、教材をアップしていく予定です。

いうまでもなく、この活動は本学だけではとてもできません。そもそもうちの大学は教員養成大学ではありません。うちの大学の持ち味は26言語の教育を学部でやっているということと、それから留学生日本語教育センターというセンターが学内にありまして、国費留学生の日本語の予備教育をやっている教員が40人近くおります。そのほかに、学部にも日本語を専門とする教員や日本語教育を専門とする教員がおります。そうした持ち味を生かしつつ、資金面では三井物産株式会社にご協力いただく。また外国につながる子どもたちの教育に詳しい専門の方々にもご協力をいただく。さらに現場の教員に検証委員あるいはサポートチームのメンバーとして参加していただく。こうしたネットワークを作って進めてきました。

このプロジェクトが始まりまして約1年たちましたけれども、試行錯誤の連続でした。今日の分科会では、苦労話がかなりの部分を占めるかもしれません。教材開発というけれども、外国につながる子どもたちの教育において教材はいったいどのように位置づけられるのか、教材はどのような役割を果たすのか。あるいはその限界は何だろうかといった問題があります。また教材が勝手に子どもたちに教えてくれるわけではもちろんなくて、そこには教師あるいは指導者という媒体者がいるわけですが、いったいその指導者・教育者にはどのような能力が求められるのかということも教材開発では問題になってきます。

先ほど言いましたようにネットワークを組んで開発作業を進めているわけですが、しかしこれはこれで非常に難しい。一言で協力、連携と言ってもさまざまな課題や障害にも出くわします。考え方の違いもありますし、価値観のズレもある。それを何とかまさしく多文化間の協働としてやっていかなければなりません。企業の文化、大学の文化、そしてさらに教育現場の文化とそれぞれが違います。その違いを、話し合いながら粘り強く少しずつ埋めていくことで一歩ずつ進んでいく。ですから必ずしも私たちが思っていたスピードでは進んでおりませんが、それでもやはりかなりの距離は来たのではないかと思います。そしてまた今後1年間の作業を通じて、現場の方々に喜ばれるものを提供していけるのではないかと考えております。

本日は、これまでの成果についてご報告するとともに、問題点についてはフロアの皆さんと議論し、さらに今後の展望について話し合えれば良いと思っております。ただ同じ時間に開かれるもうひとつのセッションも教育問題なので非常に心苦しく思っております。皆さんも決断していただいて、ご参加いただければと思います。よろしく申し上げます。

**青山** この開発教材はさまざまな試行錯誤を経て進められてきたわけですが、その成果は、ウェブ上のこちらのURL (<http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/kyouzai/brazil>) から無料でダウンロードができるようになっておりますので、まだ試されたことのない方はぜひ見ていただきたいと思っております。教材の作成は今までも試みられているわけですが、作りっぱなしではなくて、作ったものを広く公開し、さらにその結果をフィードバックする、あるいは教師と共に教材の使い方も含めて計画を作っていく、そういう意味では非常に新しい試みではないかと思っております。

では、次は3番目の報告者として、山西・小山班の活動報告を山西優二さんにお願ひします。

## 【山西・小山班】プログラムコーディネーターの専門性とは

**特任研究員・山西優二** 私たちの班は、研究テーマとして、プログラムコーディネーター・多文化ソーシャルワーカーの専門性、そしてその人材育成のためのプログラムの在り方を研究するということを掲げています。今、いろいろな地域においてこの多文化・多言語化が進んでいく中で、それぞれの事業も大切ですが、それらをどうコーディネートしていくのか、この問題はとても重要で、「コーデ

イネート」ということが事業展開においてひとつのキーワードになってきます。

では、改めてそういった中でコーディネーター、そしてソーシャルワーカー、またいろいろな名称が使われていますが、その専門性とは何なんだろう、またその専門性を育成していくためにはどういったプログラムが求められてくるのかということ、私たちは研究テーマとして設定したわけです。そこでどういうメンバーでやっていくかということに関しては、研究員、サブコーディネーター、さらにはセンター運営委員等々という表現で、7人の名前が出ていますが、その他多くの場でまさしくコーディネーターまたはワーカーとして動いている方々に協力していただいています。ですから今までのプレフォーラムでもそうですし、今日でもそうですが、全国各地でまさしくこういうコーディネーターやソーシャルワーカーに近い仕事を持たれている方々に、一緒に参加していただいて、現場から実践を通じていろいろなものを学びながら、その中から先ほどの専門性というところにつなげていくということが、私たちの研究方法でもあるし、大きな方向性ということができます。

そんな中で、まずねらいですが、大きく3つ設定しています。ひとつは、まさしく多文化・多言語化が進む現場での現状と課題とは何かを明らかにすることです。これを見ずしてなかなか議論が進まないというか当然のことですので、現状と課題からしっかり押さえようということです。それを踏まえて改めて、では専門性って何なんだろう、専門性をどういうふうな形で私たちはとらえていったらいいのかというのが2つ目のねらいです。そして、その現状、課題そしてこの専門性を踏まえた上で、私たちはそういう人材育成のプログラムとしてどういったものを作っているのか、またプログラムのありようとは何なのかということをとらえることを3つ目のねらいにしています。

この3つのねらいを2年間かけてやっていくというのが私たちのチームです。ですから、この1年間は比較的現状、課題というところをベースに置きながら、さらには徐々にそういう中から専門性像を浮かび上がらせる、頭でっかちに先に理念的・理論的に専門性から入るというやり方はしていません。できるだけじっくり現状、課題を見ながら、徐々にそういった中からどういう専門性像が浮かび上がってくるのかということをしてできるだけ丁寧に見ていく方法論をとっています。



山西優二



1年目では、ひとつ目の現状、課題から2つ目の専門性像を模索していったという流れがあります。そして2年目になりますと、改めてこの専門性像と今度はプログラム像とを連動させながら、3つがいい意味で絡み合いながら2年間の研究をしていくというところが、私たちのスケジュールになっています。

ねらいを設定したあとに、次にどういう研究方法、研究プロセスを取ってきたのかということが課題になりますが、最初にしたことは、先行研究を調べ分析するということでした。今までいろいろな方々が、いろいろな立場でソーシャルワーカーであるとかコーディネーターについて語ってきています。時には文章化しています。そういったものを一度キチンと整理してみようと。サブコーディネーターを中心にいろいろな文献等々を集めながら、そうした資料を収集してきました。分科会でもその報告を少し入れさせていただいています。

さらにはそういった先行研究を収集、整理していくプロセスとともに、面白そうだという方には私たちの研究会に来ていただいて、その方に直接語っていただくということも行ってきています。例えば日本ボランティアコーディネーター協会の代表理事である筒井のり子さんにも研究会に来ていただいて、ボランティアコーディネーターの立場からまさしく専門性って私たちはこう考えているんだよということをその場でお話いただきました。

そして、07年10月26日にプレフォーラムを行いました。ここでもやはり現状とその専門性を語っていただくということで、当日はボランティアコーディネーター、日本語学習支援コーディネーター、学校教育コーディネーター、そして国際交流のコーディネーターという四者に集まっていたいただいて、現状、課題を語りながら自分が考えている専門性ってこういうことなんだけれど、どうだろうかということ提起していただきました。

さらには、現場に入って生の活動を見ながら少しでもいろいろな声を聞きたいということで、翌11月には愛知県豊橋市の教育委員会を訪れ、そこにおける多文化ソーシャルワーカーの動きをおうかがいしました。また、京都のユースサービス協会や立命館大学大学院でどういうプログラムをやっているのかということも含めて、そこにおけるユースワーカーの研究についておうかがいし、さらには英国留学されていてそこでのユースワーカーの育成プログラムにかかわった方からもヒアリングを行いました。地域に入りながら、そんなことをさせていただいてきたというのが今までのやってきた流れだということです。

そういう活動を踏まえながら、この日を迎えたわけですが、今日は、群馬県の前多文化共生支援室長の山口和美さん、岩手県の国際交流協会の宮順子さん、そ

して金沢国際交流財団の多文化共生プログラムオフィサーの阿部一郎さんに来ていただいて、自治体および国際交流協会の職員に求められるコーディネーターということについて話していただき、少しそういう面では絞り込みをしていきたいと考えています。それぞれ職能、機能的な意味でのコーディネーターということも踏まえつつ、その現状から専門性ということを徐々に浮かび上がらせていきたいという思いから出席をお願いしています。三人三様、非常に面白い、まさしく現場の話とともにいろいろな活動を語っていただけるかと思っておりますので期待していただけたらと思っています。

そういったことをやりながら、07年度内に徐々に専門性を整理しながら次のプログラム養成というところに研究の軸を少しずつシフトさせていきたいというのが、私たちの分科会です。

**青山** ありがとうございます。ちなみにこの専門性を持ったコーディネーター、多文化ソーシャルワーカーというお話ですが、実は本センターでも Add-on-Program 多言語・多文化社会という科目で全部で20単位の授業を組んでおりまして、将来、コーディネーターの専門性が高まりましたら、本学からこういうコースを取って卒業していった学生たちがいずれそういった分野の仕事に就いていければいいなと期待しております。

続きまして、4番目の野山班の活動報告ですけれども、こちらは野山広さんをお願いしたいと思います。

## 【野山班】 地域日本語教育から見えてくるもの

**特任研究員・野山 広** 研究テーマとして、地域日本語教育プログラムの在り方を検討する、を掲げています。私が以前に在職していた文化庁の時代に地域の日本語教育というものに10年近くかかわっていたこともあって、文化庁を出るときに地域日本語学習支援の在り方を考えるための参考書、あるいは羅針盤となるようなものを出したことがあります。そのときに作った本の中では、例えば日本語教室をマンツーマン型あるいは1人の教授者が多人数を教える1対多数の教室型、その混合型というような分類をして、いくつかのモデル事例を出しています。こうした観点から見るというだけではなくて、その地域の特性を生かした町づくりのビジョンを持った上で、日本語の教室をどういうふうに運営しているかという観点からも実践研究にかかわっています。

留学生や研修生などのかかわりの中で、日本語教室を20年近くやってきた





野山 広

というようなグループもあつたりします。その場合、留学生との交流を中心とした活動から始まって、ほとんどプロと同じような有給で日本語を教室で教えているような団体を持っている地域もありました。そういった特徴を持ったところに焦点を当てて、どのような展開をしてきたのかということを経緯を含めて歴史的に分析するという縦軸のラインと、現在どんなことをやっているのかという横軸をしっかり見据えて、その特徴から分類した上で、日本語教育のプログラムそのものを顕在化していくというのが我々の目的です。

07年11月17日にプレフォーラムを行いました。そのときにお呼びしたゲストは、秋田県能代市の「のしろ日本語学習会」主宰の北川裕子さん。北川さんの教室で日本語を学び、日本語能力検定試験1級を取得し、地域で中国語を教えることも含めて貢献していた中国から来た池田さん、現在は池田理恵さんとおっしゃいます。それからそこを生涯学習、社会教育の観点からずっとフィールドとして観察・分析し、あるいはボランティアとしても協力してきた藤田美佳さん。この3人のゲストのお話を学習心理学の観点から学芸大学の高木光太郎さんと日本語教育の視点、あるいは年少者の日本語教育の視点で東京女子大学の石井恵理子さんに分析、コメントをいただきました。そのときに紹介をいただいた能代の日本語教室の写真を見ながら、どのようなプログラムが地域で展開されているか、その一端をお見せして、今日の午後のプログラムの内容へと話をつなげたいと思います。

(スライド)

最初は、「のしろ日本語学習会」の教室のシーンです。写真の人は海外から来て、研究員として能代にいらっしゃって、奥さんが実は、バイオリニストだったということで、最後にバイオリンの演奏を聴かせてもらっているところです。お互いに持っている技術や能力というか、リソースをこうやって分かち合うというような場が展開されています。

(スライド)

バス旅行の風景です。北川さんが一番重要視しているのは時間を守ることを外国人にキチンと伝えること。時間を守らないと旅行日程が遅れてしまうので、何時に集まってくださいといって、来ない場合は意図的にバスを動かす。そうすると、泣きながら走ってきたりとか、どうして私を置いて行っちゃうのと外国人が言うわけですが、そのときに日本における時間の意味の重要性について改めて説

明する。別に怒って言うのではなくて淡々と伝える。もちろん相手の文化における約束時間の意味や重要性も考慮しながら行います。

(スライド)

黒板に毎回こうやって書くという行為を大切にしている。北川さんに言わせると、例えば海外から花嫁として来日した人の場合、市役所に行ったり、子どもが入学したときなど、書く場面にたくさん遭遇する。キチンと書けないと、親としても困ることがあるし、イザとなったときに自分の名前を書けないと非常に困ってしまうので、日本語の能力が全くないゼロベースから、書くということをしかりやっていくということです。

(スライド)

次は花見の写真。何のために花見に行くかということ、もちろん日本の文化風習を伝え、分かち合うという意味はあります。ただ一番重要なのはゴミの分別について伝えること。花見に行ったときにゴミを必ず持って帰る。そのときに、どれがプラスチックゴミで、燃えるゴミ、燃えないゴミかということキチンと伝えていく。場合によっては海外のゴミ事情も聞きながら生活習慣を伝え合っているということです。

(スライド)

習字です。これも単なる習字に終わらない。最終目的として、お祝いのことばやのし袋に文字を書くときに、その地域の住民としてしっかりと筆を使った字で書けるようにということです。これは強制的にやらせるというよりも、文化を知ってもらおうとともにこういう活用する方法があるんだということを伝える場になっている。

(スライド)

楽しい忘年会のシーンですが、忘年会として活用されているだけではなくて、この中には夫を含めた家族がいて、大人の会費は3,000円ですが子どもは無料。子どもは何人でも来ていいと、それは全体で持ちます。それでいろいろな会話をしたり、みんなに知ってもらって安心して通える教室、ということをこうした場を通じて伝える工夫をしている。

(スライド)

毎年行われている盆踊り。この町で一流の先生にキチンと踊りを習い、着付けも習い、それなりの格好で住民の人と踊るという場をつくることによって、地域との交流が始まる。その成果として、例えばここに来ていたおじさん、おばさんやお年寄りがスーパーで声をかけてくれるというようなことが起きる。教室側か

ら発信していかないとなかなか交流は始まらない状況があり、積極的にそういうことをやる場所としてこの盆踊りがある。そういうのも全部をボランティアのサポーターや外国人学習者自身が支えている。

(スライド)

木曜日午前中の教室の風景です。南東の角部屋で託児室があります。下にでんぐり返しのできるようなじゅうたんが敷いてあって、実はこの周りには子どもが寝ていたりします。つまり、母親が日本語を習っている姿を見ながら子どもたちは育っていくわけです。教室がただあればいいというよりも、北川さんとしては非常にいい環境の場所を何とか見つけて、この場所を確保して常時使えるような状態をつくるというような戦略を持った教室の運営をしている。子どもがいるとうるさいと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、実際には子どもたちは静かにしている場合が多く、親と一緒に来て、まずスリッパを並べ、机とイスを一緒に並べ、布団も一緒に敷く、というようなことをやります。子どもたちは、我慢することを覚えていきます。ある種のしつけの場にもなっています。

(スライド)

料理教室です。米の研ぎ方とか出汁のとり方とかも含めて、地元の調理師にキッチンと習う。実は海外から来るとみそ汁の作り方も習えないという状況もあり、運動会など学校行事にどんな食べものを持っていったらいいのか分からない。普通の日本の家庭であれば知っているようなことを伝える場になっている。

以上、こうした年間の行事を通して、日本語・日本文化をいかにして身につけていくのかということをお北川さんが総括して話してくれました。そこには、地域住民として町に受け入れられて、自分の気持ちを自分の言葉で発信できる人として自立していくこと。そして、子どもたちにもそれを伝えてほしいという気持ちが強くある。

今回話をしていただいた池田さんもそうですが、町で中国語の講座を開く必要が生じたときに、中国語講師として白羽の矢が立ち、貢献するという経験をしています。このように、必要な人材として育ててほしい、あるいは育ててきている状況をつくっていききたいとお北川さんは言っています。

いつでもどこでも、世話になっている、あるいは教えてもらっているという状況だけじゃなくて、周りが変わり空間が変わり時間が変われば、場合によっては教える側になる。北川さんは、役割や立場の転換が起きるような状況を十数年間かけてつくってきたということであり、その結果、最近では行政側の姿勢が少し

ずつ変わってきたという。

北川さんは、人が人として生きるすべを知るためにこの教室を営んでいる、と話しています。池田さんはいろいろな事情で、プレフォーラムが開かれた11月12日直前に関東のある都市に引っ越してきたのですが、能代にいた時期と比べると学習意欲というかモチベーションが下がっていた。ところが、プレフォーラムで、池田さんご自身が最後の最後に発言しました。「自分がここへ来るまで要するにやる気をかなりなくしていた。ところが、ここにいる皆さんが自分のためにいろんな話してくれて、すごく力をいただいた」「もう一回、くじけそうになっていた学習意欲を取り戻してこれからも学んでいきたい」と強く宣言してくれた。学長とセンター長がおっしゃっていたように、協働実践をやる中でどんなフォーラムをつくるのが重要かという、参加していただいた学習の当事者がその場に来ていただいて力を失う、エネルギーを消費するというよりも、力をもらいエネルギーを補給して帰っていただけるような場所をつくれたらいいと思っています。

分科会に出席のゲストを簡単に紹介します。

田中喜美代さんは、愛媛県の松山でえひめJASLという日本語の学習団体の創設者として長い間ずっとかかわってきた方です。

石川県の県の国際交流協会でお仕事をしていらっしゃるのが今井武さん。石川県の国際交流協会は、留学生を中心とした交流活動から始めて長い間活動してきて、今もその動きの中でいろいろなことをやっています。3番目が東京都足立区の鈴木圭子さん。区役所区民課の多文化共生担当ですが、足立区は都内にありながらいわゆる集住地域でもない分散地域でもない、都会の中でその両方を持ち合わせたような動きをしているところです。あと2人は、この研究班にかかわっている宮崎妙子さんとそれから河北祐子さんです。

本年度はどちらかといえば分散地域、そして、東京都の周辺にある地域に焦点を当てて、その協働実践研究をやっていくということです。来年度は、できれば集住地域、群馬県の大泉・太田地域や長野県の上田市などに協力をしていただいて、一緒に動いていきながら活動をやっていければと思っています。

**青山** どうもありがとうございます。今回の発表は特に分散地域、つまり外国人の数が比較的少ない地域での日本語教育の話です。そういうところで実践されている方の話として、人が人として生きていくための力をつける教育をするんだという言葉は非常に感銘的でした。分散地域には集住地域とはまた違った悩みがあると思いますが、分科会ではそういう問題についていろいろと語っていただけ

るのではと思います。

続きまして、渡戸・関班の状況について報告をしていただきたいと思います。これは渡戸一郎さんをお願いしたいと思います。

## 【渡戸・関班】広域連携をどう作り出すか

**特任研究員・渡戸一郎** 07年11月7日に東京都町田市の町田市民フォーラムで、プレフォーラムを開きました。私たちは神奈川県相模原市と町田市という県境を挟んだ地域を取りあえずフィールドにしているのですが、多言語・多文化政策の点では神奈川県と東京都でかなり違いがあります。例えば医療通訳制度は東京都にはないのですが、神奈川県にはあります。外国人の市民参画ということでも、東京都の方は外国人都民会議が中断したままです。数年たっていますが、神奈川の方は県レベルでも外国人県民会議がずっと継続してきています。



渡戸一郎

そういう中で、町田と相模原という2つの地域をフィールドにした場合、実際はどんな地域的な違いがあるのか、あるいはそこで展開されている市民活動にはどういう特徴と課題があるのかということがひとつ、自治体がそこにどうかわり、市民レベルと自治体レベルで都県境を挟んでどのような広域的な結び付きができているか——こういったことが私たちの班の課題意識です。

特に外国人相談ということで、都内のリレー相談会にずっとかかわってこられた弁護士の関聡介さんと本センターの杉澤経子さんがこの班に入られて、外国人相談の問題についても重点的に柱を立ててやっていこうと考えて進めてきています。

先ほどの野山さんの報告の中で能代の例が出ましたが、日本語を教えるという表のプログラムの背後に実は「隠れたカリキュラム」があるという話だったと思うのです。その「隠れたカリキュラム」を通じて、お互いが学んだり変わっていくということが大事だというお話がありました。「協働」という言葉が流行語になっている昨今ですが、私はやや批判的に現実の動向を見ています。まさに「協働」というのは、野山さんのお話にあったように単に一緒にある目標に向かって協力するというだけでなく、それを通じてお互いがどれだけ変われるか、学べるかということにその「隠れたカリキュラム」があると思うのです。その場

合、市民と行政、市民と企業、あるいは行政と企業の間でどういう協働連携が可能なのか、さらにそれが自治体という枠を超えたときにどういう可能性があるのかということです。

07年4月から両市に協力のお願いにいき、6月から本格的に自治体それから市民団体、あるいは中間支援組織としての国際交流センター、あるいは相模原ですとラウンジというのがありますが、これらの関係者に現地でお話をうかがうという形で、今年は実態把握をやっております。

町田と相模原は隣接した地域ですけれども、実は互いにある程度のことは知っていても実際交流するということがあまりなかったということで、今回の私たちのプロジェクトを通じて相模原の市民活動をヒアリングするときに町田の人が来るとか、逆のことが行われるなどといった動きが始まっており、非常にうれしく思っています。互いにやり方や課題が違う、その一方で共通しているものもある。自治体の市民活動に対する支援の仕方、あるいは協働の仕方も違います。しかし、そういう違いがあるからこそ、逆にそれを生かして協働連携できる可能性もあるわけです。

さらに町田、相模原を取り巻く神奈川県の中核地域の大和市、座間市、厚木市など、少し南に行くと平塚市や藤沢市などがありますが、そういう広がりの中でさまざまな人と人とのネットワークがあります。それから町田市は半分以上神奈川県に食い込んでいるようなロケーションにあり、川崎市や横浜市などに隣接している。一方、東京都に入りますと八王子市や多摩市、少し行くと立川市などの動きも町田とは無縁ではない。

そういう両市を見ていくと、国籍別外国人登録者の分布が違うのです。東京都はどちらかという中国籍の方が多いけれど、神奈川県に入ると日系南米の方が多くなってくる。そういう構成の違いがあります。取り組んでいる活動も違う側面を持っている。しかし、では神奈川県内で取り組んでいる活動が東京都内の市町村あるいは市民団体が取り組んでいる活動と全く関係がないかということ、あちらでできていることがこちらでなかなかできないこともあるわけです。そういう意味で、相互補完的な連携というのも必要になってくるのではないかと思います。

今後の課題のひとつは外国人相談になりますが、各地域で対応言語がいくつかやはり限られてしまう。いわゆるマイノリティーの中のマイノリティーのような形で、少数言語グループの人たちに対する対応が、広域連携の場合、お互いに補完しながらできる可能性があるのではないかと。また、当事者グループとしての言



語グループ、あるいはコミュニティーグループの人たちのなかでどれだけ自分たち自身の活動が展開されているか、つまり自助団体、あるいは外国人主体のNGOがどれだけあるのか、そしてそれらとの連携が今後の課題かと思っております。

それから広域的に見た場合に、それぞれの地域の問題に対応できる人材が必ずしもその地域にあるわけではなく、ある意味で偏在している。これをコーディネートするのも広域連携ということではないかと思っています。そういうことで、08年には相模原の方で2回目のプレフォーラムを開いて、来年の全国フォーラムにつなげていきたいと思っています。

この過程で、神奈川県のある県立高校の統廃合にともなって、外国籍の中学生、高校生に対する支援センターができないだろうかというプロジェクトが今、提案されております。外国籍の子どもにとって、中学校から高校への進学が非常に大きなハードルであることはご承知の通りです。そして、そのハードルを少しでも越えやすくする学習支援が地域や学校で行われておりますが、外国籍の生徒の少ない学校ではあまり組織的な取り組みができないわけです。そういう分散している生徒を広域的に支援するセンターをつくっていこうというプロジェクトの構想が提起されまして、私たちの研究班が高校の先生方と連携してそのセンターの立ち上げに向けた基礎調査を行うということになりました。そういったことも、来年度の全国フォーラムではご報告できるのではないかと思っています。

明日は本センターフェローの宣元錫さんと武田里子さんに、この間の協働実践プログラムの調査の中間報告をしていただきます。それから、関さんから外国人相談ネットワークの話、さらにスペイン語圏から見た広域連携ネットワークということで、日本ペルー共生協会の高橋悦子さんから問題提起していただくと思っています。以上を踏まえて、報告会の後半で会場の皆様と積極的な意見交換を行っていきたいと思いますので、どうぞ一人でも多くの方に来ていただきたいと思っています。

**青山** この分科会のひとつのポイントとして広域連携と協働という言葉があるようになっています。広域連携という点で言いますと、東京外国人支援ネットワークというところがありますが、そこがコアになって外国人のためのリレー相談会が開かれていることを思い出しました。東京外大では26の言語を教えておりますが、この相談会の方にも本学の教員が、それぞれの専攻の専門言語の能力を生かして、ボランティアとして協力しております。

最後になりましたけれども、佐藤・金班の活動状況についてのご報告をお願いいたします。これは藤田美佳さんをお願いしたいと思います。

## 【佐藤・金班】学習サポートのモデルを作る



藤田美佳

サブコーディネーター・藤田美佳 ちょうど今、「渡戸・関班」が進学の話、神奈川県での学習支援の話で締めくくられましたけれども、当グループはまさにこの学習サポートに取り組んでおります。今後センター内での連携も含めてお互いに、チャンスが広がっていくことを実感しました。

当班の研究テーマは、外国につながる子どもの教育について、地域・学校・行政・当事者である子どもたち、学習サポートを受けたOB、OGたちも含めて協働実践モデルを構築すること、そして、そのプログラムの在り方について実践的な研究をすることです。

メンバーは、特任研究員が東京学芸大学国際教育センター教授の佐藤郡衛さん、それから「川崎市ふれあい館」職員の金迅野さん、そしてサブコーディネーターが太田市教育委員会の根岸親さん、そして私藤田、さらに研究協力員として「川崎市ふれあい館」の学習サポートのボランティアをされており、また近くの高校の教諭、それから川崎市総合教育センターの方、そして「川崎市ふれあい館」の原千代子さんをコアメンバーとして、センターの運営委員の先生3人、高橋正明先生、青山亨先生、倉石一郎先生とともに本年度は川崎市をフィールドとして取り組んでいます。

問題意識の方ですけれども、外国につながる子どもたちの数は、国籍が日本の子どもたちも含めて年々増え続けています。滞在の長期化、定住化の一方で、国際結婚の子どもについては日本生まれ、再婚による連れ子、呼び寄せと呼ばれる子どもたちも増えてきておりますし、2世、3世の出生や成長など背景は多様化してきている状況です。そのため、彼らにかかわるさまざまな組織、ボランティアがサポートに取り組んできていることは皆さんもご承知のところだと思います。

とりわけ学校教育の課題についても、これまで各地域でさまざまな取り組みがなされてきましたが、学校ベースではなかなか変わらないという現実がありました。そこで私たち研究班では、そうした状況の中、子どもたちへの支援にどのよ

うに取り組んでいったらいいのか、異なる視点から検討していく必要があるのではないか、その可能性を探ろうということになりました。

そこで、外国につながる子どもたちの学習サポートに取り組んでいる川崎市の「ふれあい館」を中核に、地域の施設、それから小中学校、高校、教育委員会をはじめ行政、ボランティア、また学習サポートを受けた側からサポート側になっていった高校生や大学生たちなどによる、連携モデルの構築に取り組むことになりました。

参考までに申し上げますと、川崎といえば北部は海外帰国の子どもたちが多いエリア、そして南部は在日韓国・朝鮮の人たちやフィリピン出身の母親を持つ子どもたちが多いエリアで、市の中でも学区によって状況が異なるという地区であります。その川崎にある「ふれあい館」ですが、皆さん、「ふれあい館」といえば在日韓国・朝鮮の方々の施設というイメージをお持ちの方も多いのではないかと思いますがいかがでしょうか。

現実には、お父さんが日本でお母さんがフィリピンの子どもたちが学習サポート事業に参加している状況です。ここには、日本人のボランティアたち、大学生のボランティアたちもたくさん参加をしています。この様子は、10月にセンターで発行されたニュースレターに、「ふれあい館」の職員で学習サポートの中心になっている原さんを取材した特集が掲載されておりますので、ぜひニュースレター最新号を手にとってごらんください。

プレフォーラムですけれども、プレフォーラムはまず学校に変わってもらおう、学校の先生たちに現状を認識してもらおう、そういう状況の中で、川崎市の総合教育センターの協力の下、「ふれあい館」の学区である川崎区の小中学校の先生を主な対象としたワークショップを07年10月12日に行いました。詳しくは明日の分科会で総合教育センターの方から報告させていただきます。将来的には学校内コーディネーターの育成も視野に入れておりまして、来年度は群馬県太田市もフィールドに加えながら取り組み、協働実践モデルの構築にとどまらず、プログラムそれから各組織の役割と全体を調整するコーディネーター、その役割についても考えていきたいと思っています。

最後のPR時刻になりましたが、明日の分科会のご案内をさせていただきます。川崎市における取り組みに加えまして地域、学校によるプログラムが、すでに展開されてきた愛知県豊田市の保見団地において活動しているNPO法人こどもの国「ゆめの木教室」の井村美穂さん、それから福岡市、九州大学がある東区の香椎浜小学校で行われている「よるとも教室」、この小学校の学区は近くに大きな

公営団地がありまして、かなり前から中国より帰国の方々が非常に多く住んでいる地域であるということと、それから九州大学の留学生たちが多数来ておりますので、その方々も参加している教室ですが、こちらの教室から九大教授の吉谷武志さんと教室運営の中心となっている古賀美津子さんをお迎えして、ディスカッションを行います。

川崎については、「ふれあい館」職員の原さん、それから学習サポートを実際に行い、また、お勤めになられている高校でも教諭として子どもたちの学習サポートに取り組んでいる方、それから総合教育センターの方に、それぞれの立場からお話をさせていただきます。各地域の取り組みを知り、共通性、個別性、それらを把握しながら、また共に子どもたちの学習サポートについて考える機会にしたいと思っております。フロアとのディスカッションの時間が少しでも長く持てるよう調整しておりますので、ぜひ皆さんにも参加していただき各地の状況もお話ししていただけたらと思います。

**青山** 私にも経験があるんですけども、なかなか学校は変わらないという現実が一面あります。ただ、いくつかの学校は非常に先進的な取り組みをされておまして、こういう学校を見てもみますと、教員だけでなく校長先生から学年主任まで学校全体として組織として、外国にかかわる子どもたちに関心を持っておられるように思います。本日も学校関係者が来ていらっしゃると思いますので、ぜひこの分科会に出席していただければと思います。

それでは、本日の午前中の全体会における、各班のプログラムの活動状況報告は以上で終わりになります。

